

ILTの悪夢再来か？ 早期に対策を

1.伝染性喉頭気管炎(ILT)は忘れた頃に流行する

最近、西日本を中心に本病の発生報告をよく耳にします。

本病はヘルペスウイルス科に属する伝染性喉頭気管炎ウイルス(ILTV)の感染によって起こる急性の呼吸器感染症で、全世界的に分布しています。本病は家畜伝染病予防法で届出伝染病に指定されている重要な感染症の一つで、一旦ILTの浸襲を受けた農場では通常、撲滅するまでにかなり長い期間を要します。

本病は1971年以前は散発でしたが、それ以降は発生羽数が急増しました。1977年から1981年までの5年間では毎年10万羽以上が罹患し、当時最も恐れられた急性感染症でした。伝播はそれ程急速ではありませんが、気が付けば鶏群全体がILT独特な奇声を発していたというような事例もありました。その後、1990年代以降は散発的に発生しましたが、発生件数、羽数は減少していました。

どうしたことでしょうか？最近、各地で発生が認められています。表1に最近におけるILTの発生状況とその年のILT生ワクチン合格量を示しました。ワクチン合格量は毎年1億ドーズに満たない量で推移しております。大流行を経験した直後は2億3千万ドーズ以上のワクチンが使用されておりました。最近のILT発生の背景には免疫率の大幅な低下があるようです。

は不可能でしょう。

年(平成)	発生羽数	ILTワクチン国家検定合格量 (dose)	
		凍結乾燥製剤	凍結製剤
1998(10)	20	97,060,000	14,049,000
1999(11)	1,600	64,015,500	8,665,000
2000(12)	2,164	98,441,500	8,611,000
2001(13)	10,000	91,947,000	8,647,000
2002(14)	241	91,282,000	7,612,000
2003(15)	0	80,544,500	6,380,000
2004(16)	6,424	90,702,500	0
2005(17)	333	92,587,000	5,905,000
2006(18)	6,986	95,568,000	0
2007(19)*	6,050		

出典:家畜衛生週報

*10月までの数値

2.ILTウイルスは農場内に常在化しやすい

本病は鶏種、日齢を問わず全ての鶏が罹患し、死亡率は通常5～20%です。時には40%に達することもあります。伝播速度は比較的遅いが、一旦本病が発生した養鶏場ではウイルスが常在化しやすく、臨床的に本病が終息した後に鶏の移動、環境悪化等のストレスが加わって突如再発することがあります。自然感染耐過鶏群で1年以上経過後にウイルスが証明された例もあります。SPF鶏にILTVを実験感染させると10時間程度で呼吸器官からウイルスが検出され、48～60 時間で最高値に達し、その後減少します。しかし、排泄量は減少してもその後、ILTウイルスは長く鶏舎内に生残し、それらが病鶏との直接接触、汚染器材等を介した間接接触あるいは汚物の飛散等によって伝播・拡散します(空気感染)。これらの農場は汚染農場となるわけです。これは避けなければなりません。

3.ILTの発生する危険性が高い農場

本病は前述したとおり、遠距離をウイルスが飛んできて突然発生すると言うようなことは殆どありません。どのような農場で発生しやすいか、以下にその要因を挙げてみます。

1)過去1年以内にILTの発生を経験した農場

このような農場ではILTウイルス野外株が鶏に潜伏感染していたり、汚染した器材と共に鶏舎内に生残していることがあります。発病した鶏群では強い免疫が長く持続するために、鶏は一見健康に見えてもウイルスを持っている個体があり、これが保毒鶏として感染源になるためです。

2)ILTの発生がある農場から雛を導入している農場

このような事例は殆ど無いと思いますが、これは絶対に避けなければならないことです。導入時は健康そうに見えても強毒株が持続感染していたり(保毒鶏)、鶏体に附着していることがあります。

3)ILTの発生がある農場に近接した農場

以前に宮崎県で本病が大流行した際、ブロイラーの出荷用運搬車輛の通行道路から500メートル以内では伝播する確率が高いと言われました。これはフケ、塵埃等に混じってウイルスが飛散したためと考えられます。また、近接しておりますと、人、器物等の往来を完全に遮断することは不可能なため、ウイルスの侵入する機会がふえることになるからです。

4)ワクチン接種後に強い副反応が認められた農場

生ワクチンによっては病原性がかなり残っている株(中等毒的)で製造されているものがあります。このワクチンを使用した農場ではワクチンウイルスが水平感染し、それが繰り返されて病原性が強くなる傾向があります。そのため、そこに新たに導入した非免疫鶏が感染を受けて発症した事例が時々ありました。このため、このようなワクチンを接種した鶏群は厳重に隔離することが重要です。

5)共同の食鳥処理場あるいはGPセンターに卵を出荷している農場

これはすぐに危険という訳ではありません。しかし、当該地域における汚染度が進行してきますと出荷用器材を通じてILTウイルスを農場内に持ち込む危険性が高くなります。出荷に使用した器材・車輛を完全に消毒すれば問題は解決します。

これらの要因を除けば感染の危険性は低くなりますが、次回はILTの予防法について詳しく解説致します。